

# 言語聴覚士養成校における学生の社会福祉に関する 意識と授業効果

—授業前・後のアンケート調査より—

坊岡 峰子<sup>\*1</sup> 金子 努<sup>\*2</sup> 玉井 ふみ<sup>\*1</sup>

\*1 県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科

\*2 県立広島大学保健福祉学部人間福祉学科

2018年8月31日受付

2018年12月7日受理

## 抄 録

言語聴覚士養成校における学生の社会福祉の知識や相談援助技術に関する認識について、現状と授業の効果を把握する目的で、社会福祉概論の授業前・後にアンケート調査を実施した。実施期間は、2009年度～2017年度、6項目の質問に7件法で評価しその理由の記述を求めた。有効回答数は授業前262名(97.8%)、授業後261名(97.4%)であった。全ての項目で授業の効果が示された。社会福祉に関する知識や援助技術が学生自身や言語聴覚士の専門性に役立つという認識は、授業前から高い傾向にあったが、授業後はより具体性をもってその有用性が認識された。一方、知識や援助技術の習得については、授業後にも低い結果であった。しかし、自分の言動の傾向などを認識する「自己覚知」と思われる記述が増加した。このことより、社会福祉の動向に関心をむけるような働きかけや、体験的に援助技術を学べる演習を有効に取り入れていく必要性が示された。

**キーワード：**言語聴覚士養成校，社会福祉，相談援助技術，自己覚知，アンケート調査

## 1. はじめに

言語聴覚士の業務は、言語聴覚士法<sup>1)</sup>により『厚生労働大臣の免許を受けて、言語聴覚士の名称を用いて、音声機能、言語機能又は聴覚に障害のある者についてその機能の維持向上を図るため、言語訓練その他の訓練、これに必要な検査及び助言、指導その他の援助を行うことを業とする者をいう。』と定義されている(第2条)。また免許に関しては、『言語聴覚士になろうとする者は、言語聴覚士国家試験に合格し、厚生労働大臣の免許を受けなければならない。』と規定されている(第3条)。さらに業務等の連携等には『言語聴覚士は、その業務を行うに当たっては、音声機能、言語機能又は聴覚に障害のある者の福祉に関する業務を行う者その他の関係者との連携を保たなければならない。』と記されている(第43条第3項)。上記のような法律に基づき、言語聴覚士法施行規則には厚生労働大臣の指定する言語聴覚士国家試験科目の一つとして「社会福祉・教育」が挙げられている<sup>2)</sup>。

上記を踏まえ、保健福祉学部コミュニケーション障害学科(以下、本学部、本学科)では「社会福祉概論」を2年次後期に、必修科目として開講している。本学部では、この科目は2008年度まで学部共通科目として開講され、学部内5学科のうち本学科のみ必修科目となっていた。そのため、2009年度からは本学科単独で開講することになり、筆者らが本科目の担当となった。

言語聴覚療法の対象者は、新生児から高齢者まで幅が広く、コミュニケーションに何らかの障害をもつ人々である。さらに、厚生労働省が定めるリハビリテーション(以下、リハビリ)の施設基準では<sup>3)</sup>、脳血管疾患等リハビリの言語聴覚療法は「遮蔽等に配慮した専用の個別療法室1室以上を別に有していること。」とされていることもあり、個室でリハビリをすることが多い。このような障害の特性とリハビリの環境上からも、患者自身やその家族から、障害に関することや、社会保障制度、介護保険制度などに関する質問、さらに心理的な悩みなどの相談を受けることも少なくない。

筆頭著者は、言語聴覚士(Speech-Language-Hearing Therapist 以下、ST)の他に、社会福祉士、介護支援専門員の資格を有し、医療と社会福祉の現場を経験してきた。その経験を通して、STは社会福祉制度に関する知識をもち、相談援助技術を習得していることは必須であり、そのことが専門性の向上にもつながると考えていた。そこで本科目では、できるだけSTの臨床業務と結びつくように授業をすすめてきた。さらに、診療報酬や介護報酬の改定をはじめ、関連する法規や福祉現場の動向などの最新情報および、地域での具体的な連携内容を教授することを目標として、第二、第

三著者と授業内容を分担してきた。

本科目の授業内容がST養成校において、どの程度ST業務と結びつけて行われているか、また本科目の重要性や学習効果などに関する先行研究はみあたらない。そこで本研究では、ST養成校に在学する学生の、社会福祉に関する知識や技術についての意識や習得度について、授業前・後および年度を追うごとの変化を分析し、本授業の効果と学生の意識の変化を明らかにする。

## 2. 用語の定義

### 2.1 社会福祉

「社会福祉」の定義は論者により異なる点があり、決まったものはないが、一番ヶ瀬<sup>4)</sup>は、「福祉というのは暮らしのあり方であり、それをめぐる社会方策、また積極的な社会的努力を社会福祉と呼んでいい」と述べている。また、社会福祉という言葉には二通りの意味が含まれており、「より良い生活」という目指すべき目的や理想としての意味と、もう一つは、今ある社会福祉の諸制度や諸活動という実態としての意味があると考える<sup>5)</sup>などがある。本研究ではこのような内容全てを含めた広義の社会福祉を対象とする。

### 2.2 相談援助技術

相談援助技術とは、「生活の中でなんらかの生きづらさ、暮らしづらさを抱えた人々(子ども、家族、グループ、成人)を、その人々の個性(生活観、世界観)や人権を尊重しつつ、より快適に暮らせるように支えていく上で不可欠な相談活動に伴う援助」<sup>6)</sup>とされている。この援助技術を構成するものとして、個別援助技術(ケースワーク)、集団援助技術(グループワーク)、地域援助技術(コミュニティワーク)が挙げられる。本稿ではこの中で主に、言語聴覚療法での個別療法、集団コミュニケーション療法を念頭におき、個別援助技術と集団援助技術にあたる内容を示すものとする。

## 3. 方法

### 3.1 対象および実施期間

2009年度から2017年度に、本学部本学科2年次(後期)に配当されている社会福祉概論(必修科目)の履修者。

### 3.2 調査方法

毎年度の授業の開始直後に、まず本アンケート調査の主旨を説明し、アンケート用紙を配布、授業開始前に回収した(以下、授業前)。そして、本科目の最終授業(15コマ目)の授業後に再度アンケート用紙を配布、回収した(以下、授業後)。本アンケート調査を実施する教員は成績を判定する教員と同一であるこ

とから、記載に影響がでないよう無記名とした。

### 3.3 調査項目

本研究の主旨より、社会福祉に関する知識や、社会福祉の相談援助技術が、学生自身の生活や、言語聴覚療法の対象者に役立つと思うか（全4項目）、現在の社会福祉に関する知識および相談援助技術の習得度について（全2項目）の6項目を7件法で尋ね、さらに各項目で評価した理由について自由記述を求めた。記述欄はなるべく空欄にせず、わからなければ「わからない」と記載するように指示をした。また授業前には授業に期待する内容を、授業後には授業の感想および授業の改善点について自由記載項目を設け、全7項目で構成した（表1）。最後に本アンケート結果の活用について、「同意する、同意しない」と記載し、いずれかを選択するようにした。

なお、回答は7件法であったが、「1. 全くそう思わない」を1点、「3. どちらともいえない」を4点、「非常にそう思う」を7点というように点数に換算して扱い、点数が低いほど、社会福祉に関する意識や技術の習得感などが低いことを示すように設定した。

### 3.4 分析方法

各項目の授業前と授業後の比較は、評価値を順序尺度としてとらえ、中央値と最大値および最小値での検討を行った。7件法での回答が得られた6項目についての検定は、アンケートは無記名で実施したため記載者の同定ができず、対応のない2群とし、Mann-Whitney U検定を行った。また、授業前の意識に関する変化を各項目間と年度間で比較した。年度間の比較には、Kruskal Wallis 検定を行い、有意差がみられた

ため、該当する年度を特定する目的で Bonferroni 検定を行った。これらの統計処理には SPSS22.0 を使用し、統計学的有意水準を5%とした。

自由記述の内容はエクセルに入力した。記述内容は各項目で一見していくつかの高頻出語が認められた。そのため、以下の方法で内容のグループ分類を行った。まず、エクセルの[条件付き書式]機能内の、[セル強調ルール]の[文字列]を使用して、キーワードを設定し、セルに色付けをした。その後、セルの色でフィルターをかけ、記述内容のグループ分類を行った。本稿では、7件法の分析結果より、その評価理由を詳細にみるために、項目6の「現在の社会福祉の相談援助技術の習得度」に関する記述の分析を行った。項目6では、相談援助技術を「習っていない」「学ぶ機会がなかった」「学んでいない」など、同じ意味を表すと考えられるキーワードを順番に検索し、セルを同色に色づけした。同様の方法で、記述内容を見ながらキーワードを設定して、グループ分類を行った。その結果を第二著者と確認し、グループを説明する名称をつけた。なお、記述内容は、記述欄が1行程度であったため、一人一文のみで複数のグループに該当する記述はなかった。

### 3.5 倫理的配慮

調査に関しては、その目的、方法および調査への同意の有無により不利益を受けないこと、個人は特定されないことを説明した。さらに、アンケート用紙には結果の使用について同意の有無を記載する項目を設け、「同意しない」を選択した回答者は分析対象から除外した。

表1 質問項目とスケールの表記内容

|  |               |               |              |
|--|---------------|---------------|--------------|
| 1. 社会福祉に関する知識は、あなた自身の生活に役に立つと思いますか？  |               |               |              |
| 2. 社会福祉に関する知識は、言語聴覚療法の対象となる患者さんに役立つと思いますか？   |               |               |              |
| 3. 社会福祉の相談援助技術の習得は、あなた自身の生活に役立つと思いますか？   |               |               |              |
| 4. 社会福祉の相談援助技術は、言語聴覚士としての専門性に役立つと思いますか？  |               |               |              |
| 5. 現在あなたは、社会福祉に関する知識をどの程度もっていますか？  |               |               |              |
| 6. 現在あなたは、社会福祉の相談援助技術をどの程度習得していますか？  |               |               |              |
| 7. 社会福祉概論の授業内容に期待・希望することを書いて下さい。   |               |               |              |
| <b>7件法スケール表記</b>   |               |               |              |
| <b>&lt;項目 1~4&gt;</b>  |               |               |              |
| <table border="0" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 33%;">全くそう<br/>思わない</td> <td style="width: 33%;">どちらとも<br/>いえない</td> <td style="width: 33%;">非常に<br/>そう思う</td> </tr> </table>   | 全くそう<br>思わない  | どちらとも<br>いえない | 非常に<br>そう思う  |
| 全くそう<br>思わない   | どちらとも<br>いえない | 非常に<br>そう思う   |              |
| <b>&lt;項目 5&gt;</b>  |               |               |              |
| <table border="0" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 33%;">全く<br/>もっていない</td> <td style="width: 33%;">どちらとも<br/>いえない</td> <td style="width: 33%;">十分<br/>もっている</td> </tr> </table>   | 全く<br>もっていない  | どちらとも<br>いえない | 十分<br>もっている  |
| 全く<br>もっていない   | どちらとも<br>いえない | 十分<br>もっている   |              |
| <b>&lt;項目 6&gt;</b>  |               |               |              |
| <table border="0" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 33%;">全く<br/>習得していない</td> <td style="width: 33%;">どちらとも<br/>いえない</td> <td style="width: 33%;">十分<br/>習得している</td> </tr> </table> | 全く<br>習得していない | どちらとも<br>いえない | 十分<br>習得している |
| 全く<br>習得していない  | どちらとも<br>いえない | 十分<br>習得している  |              |

### 3.6 授業内容

本科目は2年次(後期)に配当された必修科目である。毎週1コマずつ、90分間の授業を15コマ実施した。授業の主な内容は表2に示す通りである。具体的な内容は、社会福祉制度の改定、2年ごとに見直される診療報酬の改定、3年ごとに見直される介護報酬の改定などに応じて最新の情報を提供するようにした。また、STの業務と社会福祉の関連性を身近なものとして理解できるように、言語聴覚療法や診療報酬に関する具体的な事例や、著者らが臨床上で経験してきた、言語聴覚療法時に患者や家族から受けた相談内容、社会保障制度、介護保険制度の活用などについても、個人情報に留意し、事例提示するように心がけた。日常的にも社会福祉に対する関心を高めさせることを目的に、授業日に近い日に報道された、社会福祉に関する新聞記事を取り上げるようにした。

相談援助技術に関しては、主に援助関係を形成していくために必要不可欠なソーシャルワーカーの「態度」である、個別化、受容、非審判的態度、自己決定の原則など「バイスティック(Biestek)の7原則」<sup>7,8)</sup>を中心とした内容の説明と簡単な演習を実施した。さらに、コミュニケーション技法やテキストなどの事例検討などを、演習形式で行いコミュニケーションスキル

などについて体感できるように心がけた。また、授業時間外に障害児・者、認知症者本人または家族の手記を読み、STの視点でレポートを作成・発表することを課題とした。

毎時間の授業の最後には、授業のまとめと感想を書いて提出させた。その内容により、授業の進行スピードを調整し、理解が不十分だと思われる点は次の時間に補足を行った。

## 4 結果

### 4.1 対象者

本科目の履修者は268名。アンケートの回収は、授業前が268名(100%)、そのうち、結果の使用に同意しないを選択したものと、無回答の項目があったものは対象から除外した。その結果、授業前の有効回答は262名(97.8%)。授業後は回収数が266名(99.3%)、有効回答は261名(97.4%)であった(表3)。

### 4.2 授業前・後の比較

質問項目1から6について得られた得点を、授業前・後の2群間で比較を行った(表4)。授業前・後で全ての項目について授業後が有意に高くなっていた( $p < 0.001$ )。社会福祉に関する知識が自分や患者さんに

役立つと思う(項目1,2)、相談援助技術は自分や専門性に役立つと思う(項目3,4)については、授業前から中央値が5.0点以上あったが、授業後にはさらに上昇し全て6.0点以上となった。

それに対し、社会福祉に関する知識(項目5)は授業前は2.0点、相談援助技術の習得(項目6)に関しては1.0点と低い結果であった。授業後は項目5は5.0点、項目6は4.0点まで上昇したが十分とは言えず、学生による差(1-6点)もみられた。特に、相談援助技術(項目6)の習得については、授業後も4.0点「どちらともいえない」とどまった。

そこで、項目6について、評価した理由に関する自由記述の内容をみると、「相談援助ということばも、その内容もわからない。」「(用語を聞いたことはあるが)内容を十分に理解していない」「知識としてはあるが、実行できるかわからない(自信はない)。」「実行しようとしている(実行している)」、「わからない」、「その他」にグループ分類できた(表5)。

その内訳は、授業前には「相談援助技術ということばも、その内容もわからない。」(54.2%)と「内容を十分に理

表2 主な授業内容

| 回                   | テーマ                            | 内容                               |
|---------------------|--------------------------------|----------------------------------|
| 1                   | 社会福祉の基礎、言語聴覚士と社会福祉             | 社会福祉とは何か? 言語聴覚士の専門性と社会福祉について考える。 |
| 2                   | 社会福祉の歴史、制度                     | 社会福祉の沿革と歴史について。                  |
| 3                   | 社会福祉に関する政策動向                   | 年金、医療保険、公的扶助など                   |
| 4                   | 社会保障・保健福祉サービス                  | 福祉・医療に関する動向について。                 |
| 5                   | 児童に対する支援と制度                    | 児童に対する支援と制度について。                 |
| 6                   | 児童に対する支援の実際                    | 障害児に対する支援の実際、主に三原市の状況・本学との連携     |
| 7                   | 障害者福祉①                         | ・障害児・者に関する法規関係                   |
| 8                   | 障害者福祉②                         | ・障害認定・手帳・サービス<br>・雇用など           |
| 9                   | 高齢者福祉①                         | ・高齢者福祉、介護保険の現状と動向                |
| 10                  | 高齢者福祉②                         | ・医療と介護・福祉の連携<br>・ケアマネジメントの視点 など  |
| 11                  | 相談援助の歴史・理論・実際                  | 相談援助に関する基礎                       |
| 12                  | 相談援助の実際                        | 事例から考える                          |
| 13                  | 相談援助技術と言語聴覚療法                  | 相談援助技法を考える、演習                    |
| 14                  | 課題発表                           | 読書内容の発表(STの視点で考える)               |
| <b>&lt;定期試験&gt;</b> |                                |                                  |
| 15                  | 試験解説、言語聴覚士に求められる社会福祉の知識・技術(総括) | 試験の回答・解説、相談援助の演習、まとめ。            |

表3 対象者

| 履修者数 | 回答者数 (人)   |             |             |             |
|------|------------|-------------|-------------|-------------|
|      | 授業前        |             | 授業後         |             |
|      | 回収         | 有効回答        | 回収          | 有効回答        |
| 268  | 268 (100%) | 262 (97.8%) | 266 (99.3%) | 261 (97.4%) |

表4 各項目の授業前・後の得点比較

| 項目 | 質問内容                            | 授業前 |         | 授業後 |         | pvalue* |
|----|---------------------------------|-----|---------|-----|---------|---------|
|    |                                 | 中央値 | min-max | 中央値 | min-max |         |
| 1  | 社会福祉に関する知識はあなた自身の生活に役立つと思うか     | 6.0 | 1-7     | 6.5 | 2-7     | <0.001  |
| 2  | 社会福祉に関する知識はSTの対象となる患者さんに役立つと思うか | 6.0 | 2-7     | 7.0 | 2-7     | <0.001  |
| 3  | 社会福祉の相談援助技術の習得はあなた自身の生活に役立つと思うか | 5.0 | 1-7     | 6.0 | 3-7     | <0.001  |
| 4  | 社会福祉の相談援助技術は、STとしての専門性に役立つと思うか  | 5.0 | 1-7     | 6.5 | 3-7     | <0.001  |
| 5  | 現在、社会福祉に関する知識をどの程度もっているか        | 2.0 | 1-6     | 5.0 | 2-6     | <0.001  |
| 6  | 現在、社会福祉の相談援助技術をどの程度習得しているか      | 1.0 | 1-5     | 4.0 | 1-6     | <0.001  |

\*: Mann-Whitney U検定

表5 相談援助技術習得(項目6)の評価の理由(自由記述)と回答者数

| 評価の理由(分類名)                      | (人)               |                   |
|---------------------------------|-------------------|-------------------|
|                                 | 授業前               | 授業後               |
| 相談援助技術ということばも、その内容もわからない。       | 142 (54.2%)       | 0 (0.0%)          |
| 相談援助技術の内容を十分に理解していない。           | 26 (9.9%)         | 20 (7.7%)         |
| 相談援助技術に関する知識はあるが、できるかどうかはわからない。 | 55 (21.1%)        | 199 (76.2%)       |
| 実行しようとしている(実行している)。             | 3 (1.1%)          | 15 (5.7%)         |
| わからない                           | 27 (10.3%)        | 7 (2.7%)          |
| その他                             | 9 (3.4%)          | 20 (7.7%)         |
| <b>有効回答数</b>                    | <b>262 (100%)</b> | <b>261 (100%)</b> |

解していない。」(9.9%)で6割を超えており、「知識はあるが、できるかどうかはわからない。」が21.1%、日常場面で悩みを相談された時などに「実行しようとしている(実行している)」が1.1%、「わからない」が10.3%、「その他」が3.4%であった。「その他」は、「なんとなく」や理由としては不適切な記述であった。それに対し、授業後には「その内容もわからない」は無く「内容を十分に理解していない。」が7.7%となった。一方、「知識はあるが、できるかどうかはわからない。」が76.2%を占めており、「実行しようとしている(実行している)」は5.7%になり、「わからない」は2.7%、「その他」は7.7%であった。授業後の「その他」は、「もっと知識や技術を身につけたい」といった感想などで、評価の理由としては分類できないものが多くあった。

これらの記述内容を授業前・後で比較すると、授業後には9割以上が内容は理解していたが、「できるかどうかはわからない。」が7割以上と授業前の3倍以上になっていた。その具体的な内容をみると、授業前

には「相談されても何も答えることができないから」「社会福祉に関しての知識がないから」など相談相手に自分が何らかの答えを出せないから、といった内容であった。しかし、授業後には、「相手の立場になって物事を考えることは難しく、客観的に考えることが難しいと感じる」「日常会話の中で、うなづく等の反応をすることはあっても、内容を整理して相手に確認するなど全くできていない」「バイスティックの7原則など自分に足りていないものが多くみつかった」など、相談援助技術の原則にそった内容が多くみられた。また、「実行しようとしている(実行している)」も人数は少ないが、授業後には増えており、その内容は授業前には「臨床心理学などの講義で学んだから」「全く習っていないが人の話を聞くことはできるから」などであったのに対し、授業後には、「授業で学んだことを日常生活にも活かした場面があるから」「授業を受けて実感したから」「授業で学び、演習して、心がけているつもりだから。」と授業で実感したことを日常

でも生かそうとしている内容となっていた。

### 4.3 授業前の項目間および年度間の比較

まず、授業前の評価を項目間で比較すると、図1に示したように、社会福祉の知識や相談援助技術が学生自身やSTの専門性に役立つと思うかを質問した、項目1から項目4は、全ての年度で評価4（どちらともいえない）より高い評価であった。一方、社会福祉に関する知識や相談援助技術の習得度について質問した、項目5と項目6では、全ての年度で、評価3以下と低い結果であった。

次に、各項目の評価を年度間で比較すると、項目5と項目6で差があることが示され（Kruskal Wallis 検定）、主に2016年度と複数の年度との有意な差がみられた。しかし、年々評価が上昇あるいは下降するといった一定した傾向はみられなかった。

## 5. 考察

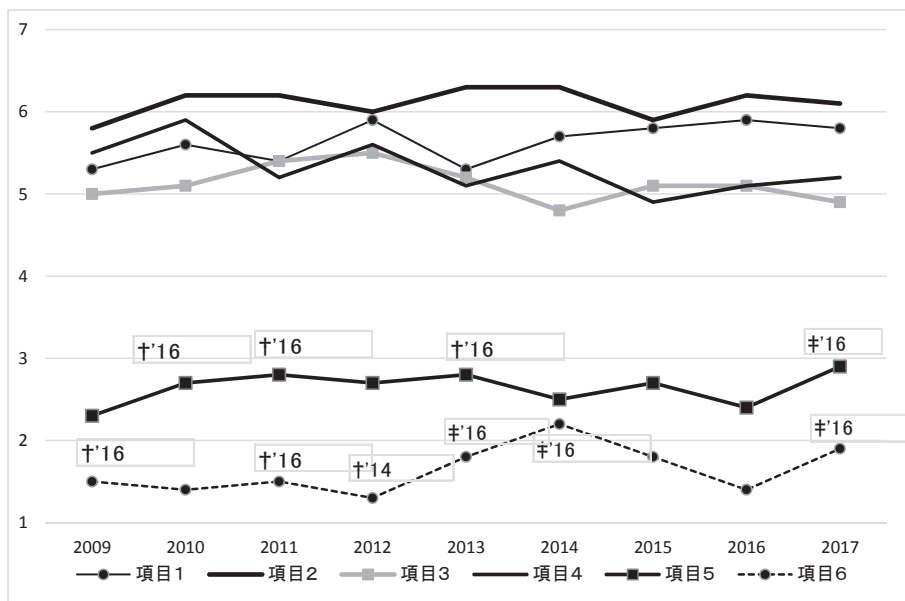
### 5.1 授業前・後の比較

授業後には全ての項目で評価が上がっていた。社会福祉の知識や相談援助技術の有用性については、授業前からやや高い傾向にあった。これは、社会福祉に関する内容は、学生自身の生活にも、STの対象者にもなんらかの役に立ちそうという認識はあったからだと考えられる。そして、授業後にはさらに「非常にそう思う」に近い評価となっていた。これらの項目に関する記述では、授業前には漠然とした必要性を感じている内容が多くみられたが、授業後には「保険や年金について自分や患者さんに必要なことが沢山ある」「介護サー

ビスなどを知っていれば相談にのれる」「バイスティックの7原則は必要だと思う」など具体的な内容をあげたものが多くみられた。これらの記述内容の変化より、授業後には、社会福祉に関する知識や援助技術など、具体的な知識を得たことで、その内容をより身近に感じ、特にSTの対象者やその家族への支援には直結することであるという認識が高まったと考える。

社会福祉に関する知識、相談援助技術の習得についても、授業後に評価は上昇したが、中央値は5点以下であった。特に、相談援助技術の習得に関しては、中央値は4点と「どちらともいえない」という低い評価であった。しかし、自由記述をみると、授業前には、援助技術の意味や何を示すのかもわからないという記載が多かったが、授業後には、「知識はあっても実際にできるほど習得できていない」という記載が増加していた。この結果から、相談援助技術に関する知識を得ることで、その有用性は感じる一方、演習を通して、実践できるだけの技術は習得していないことを認識したと考えられる。

対人援助をするにあたり、援助、特にソーシャルワークの分野では、相手の話を受容、共感し、心に寄り添って聴くためには「自己覚知」が必要であるとされている<sup>9)</sup>。自己覚知とは、援助者が他者を理解しようとするときに、ありのままの他者を理解しうるために、援助者自身の個性、性格、能力、言動の傾向を的確に知ることであるとされている。このことから、相談援助技術を学び、演習で体験的に経験することで、これまでには意識していなかった対人面における自分の特徴に気づいたり、意識したりするようになった効果が



†: p < 0.05 (Bonferroni)      '14: vs 2014  
 ‡: p < 0.01 (Bonferroni)      '16: vs 2016

図1 授業前の年度間比較

でていると考えられる。これは、将来STになり、患者と1対1でコミュニケーションをとることが主となる専門職者として、大変重要な気づきにつながったと考える。

原ら<sup>10)</sup>は、臨床実習を終了した言語聴覚療法学科の学生を対象に、臨床実習への満足度に影響する要因として、満足度や実習の成績が高い者ほど、知識・技術の習得や体験、指導者や症例等との関わりを通じ、実習生自身の内的統制を高める機会になっていたことを報告している。さらに、学生に成功体験を重ねさせることで、内的統制をより強くする必要性も指摘している。小林ら<sup>11)</sup>は2000年に地域福祉・保健施設におけるSTの言語障害者に対するサービスの実態をアンケート調査した結果より、STの個別訓練の内容として、心理面へのアプローチの割合(22.1%)が、機能的言語訓練(27.9%)、実用的コミュニケーション訓練(23.1%)と同等であったことを報告している。この調査の時期よりもさらに地域、在宅での生活を推し進められている現在では、STにこの心理的アプローチを求められる機会がより増えていることが推測される。

以上の結果を踏まえると、本科目での援助技術の習得にむけた気づきは重要であり、今後さらに基礎から体験的に理解していく演習を増やすこと、それを成功体験に結びつけていく必要性が示唆されたと考える。

## 5.2 授業前の項目間および年度間の比較

授業前の評価を項目間で比較すると、社会福祉の知識や相談援助技術が学生自身やSTの専門性に役立つという意識は全年度をとおして高い反面、その知識や援助技術の習得に関しては低いことが示された。さらに年度間の差をみると、知識や援助技術の習得に関して若干の変化はみられたが、一定した傾向はみられなかった。つまり、社会福祉に関する知識や技術はSTの臨床にも有用であると感じている一方、自主的な学習などはしていないという状況が、9年間継続しているということである。援助技術の習得に関しては、「5.1 授業前・後の比較」で示したように本科目の受講をとおして、体験的に自覚した内容を習得していく努力をするようになれば良いと考える。しかし、知識については、社会福祉に関する報道は、年々日常的に見聞きすることが多くなっていくことを勘案すると、関心の低さを示していると考えられる。

近年の医療、保険、福祉制度に関する国の政策は、地域や在宅での生活を主軸にしていく方向にある。また、これらの制度は介護報酬は3年ごと、診療報酬は2年ごとといった高頻度の改定があり、その内容は国家予算や政策の影響を大きく受ける傾向にある。また少子高齢化、核家族化がすすむなか、それらを背景とする子どもや高齢者に対する虐待や殺人などの事件は後を絶たない。これらの被害者や加害者となる可能性がある人がSTの対象となることも少なくない。これ

らを勘案すると、やはり社会をはじめ社会福祉に関する情勢や動向に、学生時代から関心を高めておくことは必須であると考えられる。

本科目は2年次の配当であり、専門性に関する意識はまだ低い時期かもしれないが、この時期からの意識改革のためにも、本科目の重要性が示されたと考える。

## 6. 研究の限界

本研究は無記名で調査を実施したため、授業前・後のデータを対応あるものとした統計的分析が出来なかった。また、授業前・後では同意者や履修登録者数も変化している年度があり、年度別の詳細な分析も困難であった。しかし、9年間のデータがあり、授業前・後の変化に関する一定の傾向については考察できたと考える。

## 7. まとめ

社会福祉概論の授業前・後に社会福祉に関する知識や相談援助技術について学生の生活上での意識、STの専門性との関係についてアンケート調査を実施し、その現状と授業の効果を分析した。その結果、授業後にはいずれの意識も向上していた。しかし、社会福祉に関する知識や相談援助技術の習得は十分とはいえない結果であった。一方、授業がそれらの重要性に気づく貴重な機会になったことが示された。これらのことから、社会福祉分野は幅広く、15コマで知識と技術を十分に習得させることは困難であるが、その内容は学生自身の生活ばかりでなく、STの質の向上にも重要である。以上の結果より、本科目の内容をできるだけSTの臨床と結びつけるよう考慮してすすめると同時に、日常的に社会情勢や社会福祉の動向に関心を向けさせる働きかけや、体験的に援助技術などを学べる演習的内容を有効に取り入れていく必要性が示された。

今後さらに多職種連携や医療・保健・福祉の切れ目のない支援が求められるなか、地域や在宅での生活を見据えたりハビリティをすすめることのできるSTを養成していきたい。

## 謝辞

本研究をすすめるにあたりアンケートに回答してくれた学生の皆さん、不備なデータからの統計処理に関してご助言を下さいました本学部の先生方、特に急な質問にも丁寧かつ具体的な指導をして頂きました理学療法学科の飯田忠行教授に深謝致します。

## 引用文献

- 1) 言語聴覚士法. 言語聴覚士国家試験出題基準. 公益財団法人医療研修推進財団, 東京, 医歯薬出版, 付録 1-7, 2013
- 2) 言語聴覚士法施行規則. 言語聴覚士国家試験出題基準. 公益財団法人医療研修推進財団, 東京, 医歯薬出版, 付録 8-13, 2013
- 3) 脳血管疾患等リハビリテーション料, 医科点数表の解釈. 東京, 社会保険研究所, 1988-1993, 2018
- 4) 一番ヶ瀬康子: 新・社会福祉とは何か. 東京, ミネルヴァ書房, 8, 1990
- 5) 大久保秀子: 新・社会福祉とは何か 第3版. 東京, 中央法規, 4-5, 2018
- 6) 戸塚法子: 相談援助技術とソーシャルワーク実践. 相談援助演習研究会編, はじめての相談援助演習. 京都, ミネルヴァ書房, 8-11, 2015
- 7) Biestek F. P.: The Casework Relationship; 尾崎新, 福田俊子ほか訳, ケースワークの原則 援助関係を形成する技法. 東京, 誠信書房, 2006
- 8) 渡部律子: 高齢者援助における相談面接の理論と実際 第2版. 東京, 医歯薬出版, 31-40, 2011
- 9) 岩崎久志: 看護・チーム支援に活かすカウンセリング 対人援助, 多職種連携に必要なコミュニケーション技法. 東京, 晃洋書房, 22-25, 2014
- 10) 原修一, 飯干紀代子ほか: 言語聴覚士実習生の臨床実習への満足度に影響する要因—テキストマイニングによる検討—, 九州保健福祉大学研究紀要 12: 149-155, 2011
- 11) 小林久子, 田村洋子ほか: 地域福祉・保健施設における言語障害者へのサービスの実態: 言語聴覚士に対するアンケート調査, 聴能言語研究, 17: 86-91, 2000



## Perceptions of social welfare in speech-language pathology students and impact of a lecture course : A pre- and post-course questionnaire survey

Mineko Booka<sup>\*1</sup> Tsutomu Kaneko<sup>\*2</sup> Fumi Tamai<sup>\*1</sup>

\*1 Department of Communication Sciences and Disorders, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

\*2 Department of Human Welfare, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

Received 31 August 2018

Accepted 7 December 2018

### Abstract

A pre- and post-course questionnaire survey was administered to speech-language pathology students to investigate the effects of a lecture course on their knowledge of social welfare and recognition of consultation skills in social work. The study period was from 2009 to 2017. The questionnaire had six items scored on a seven-point scale and free-response questions about the scale. A total of 262 (response rate, 97.8%) and 261 (response rate, 97.4%) students responded before and after the lecture course. The results of all questions showed the effectiveness of this course. Pre-course scores were high for recognition of the personal and professional usefulness of knowledge of social welfare and consultation skills. Moreover, the usefulness of them were recognized concretely. On the other hand, post-course scores related to acquisition of knowledge and consultation skills remained low. However, student responses became more indicative of self-awareness in the post-course questionnaire. Learning about social welfare is beneficial in strengthening the expertise of speech-language pathologists who need to collaborate with other professionals and provide psychological support to those who are in need. Practical exercises may need to be integrated into their training.

**Key words:** speech-language pathologist education, social welfare, self-awareness, consultation skills in social work, questionnaire survey